ICT 海外ボランティア会会報
第 101 号

2021 年 12 月 5 日（日）

URL: https://ictov.jimdo.com
EML: info.ictov@network.email.ne.jp

目次

◆特別寄稿
ＮＴＴ西日本　国際室の活動　当会顧問
NTT 西日本 技術革新部 技術戦略部門
国際室長　本山　智祥

◆特別寄稿
岩槻日記(17)　当会特別顧問　石井　孝

◆海外グラフィティ
「ザ・殺し文句」を読んで感じたこと
「倉本聰の言葉」を読んで
日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

◆海外便り
スペインバスク地方・フランス南西部俳柳紀行(1)
元 JICA ｼﾆｱ海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ　北垣　勝之

◆第 11 回 ICT 海外情報ウェブサロン模様　事務局

特別寄稿

ＮＴＴ西日本　国際室の活動

当会顧問
NTT 西日本 技術革新部 技術戦略部門
国際室長 本山　智祥

ＩＣＴ海外ボランティア会の皆様、ＮＴＴ西日本 国際室の本山智祥です。この度、会報へ寄稿する機会を頂き、誠にありがとうございます。ＮＴＴ西日本 国際室の活動をご紹介させて頂きます。

はじめに

ＮＴＴ西日本グループは、社会を取り巻く環境変化がもたらす様々な課題に対し、ＩＣＴを活用して解決する先駆者として、社会の発展や持続的成長（ＳＤＧｓ）に貢献し、地域から愛され、信頼される企業に変革し続ける「ソーシャルＩＣＴパイオニア」を目指しております。

私たちを取り巻く社会においては、「地域格差の是正」や「社会インフラ維持」、「少子高齢化に伴う労働人口減少への対処」など、さまざまな社会課題が顕在化しています。また、新型コロナウィルス感染症の拡大により、世の中の常識や価値観が大きく変わってきたと感じています。

そうした社会変容の中、多様化・高度化するお客さまの要望・課題に対し、より広い視座のもと、既存の発想にとらわれず、社内外の様々な方々とのイノベーティブなチャレンジや共創を通じて、社会課題の解決に貢献していく必要があると考えています。

キャリアとの活動

ＮＴＴ西日本では、２０１８年から韓国の大手通信会社であるＬＧ Ｕｐｌｕｓ社とつくばフォーラムやマイスターズカップといったイベントの視察、ＦＴＴＨに関連する各種情報交流や両社の設備視察などの交流を行って参りました。

２０１９年に提供したＦＴＴＨ業務改善研修に続き、コンタクトセンタ運営研修を提供すべく、課題のヒアリングやワークショップでの議論、弊社多言語センタの視察など、準備を進めておりましたが、新型コロナウィルスの感染拡大により、本研修の提供については、一旦保留としております。

現在は、オンラインでのイベント視察後に意見交換やディスカッションを行うなどの工夫をしつつ、これまでのＦＴＴＨに関連する情報交流に加え、各種産業分野での社会課題解決ソリューションに関する情報交流を行い、更にリレーションを深めています。今後は、そうした分野でのビジネス連携など、期待されるところです。

新領域ビジネス

ＮＴＴ西日本では、ＦＴＴＨサービスに関連した取り組みに加え、グループ会社による海外展開や海外の技術を取り入れたサービス展開にも取り組んでいます。

ＮＴＴソルマーレ社ではグローバルに拡大するスマートフォンアプリ市場においてゲーム事業を展開し、ジャパン・インフラ・ウェイマーク社ではＮＴＴ西日本グループで培ったインフラ点検ノウハウを強みとして、老朽化が進む日本全国のインフラ点検・保

守業務の効率化という社会課題に取り組んでいます。また、２０２０年４月には、朝日放送グループホールディングス株式会社との共同出資で、スポーツ映像配信分野における新会社「株式会社ＮＴＴ Ｓｐｏｒｔｉｃｔ」を設立いたしました。
ＮＴＴ Ｓｐｏｒｔｉｃｔ社では、イスラエルのＰｉｘｅｌｌｏｔ．ｌｔｄが開発したＡＩによる自動撮影や編集機能を備えた高解像度で撮影が可能な無人撮影カメラシステムを使い、スポーツ観戦×ＩＣＴで新たなスポーツ観戦体験を提供し、各地域で行われるスポーツ大会の魅力を世界に発信することで地方創生への貢献を目指しています。

国際協力活動

ＮＴＴ西日本では、これまで各国の情報通信分野の発展に貢献するため、研修生を受け入れ、技術研修を行っています。２０１６年より継続して、ＡＰＴ（Ａｓｉａ－Ｐａｃｉｆｉｃ Ｔｅｌｅｃｏｍｍｕｎｉｔｙ）より、アジア太平洋地域からの研修生を受け入れていましたが、２０２０年については、新型コロナウィルス感染症対策のため、来日ではなく、Ｗｅｂでの技術研修を実施いたしました。
タイ、ブータン、マレーシア、ミャンマー、モルディブの５ヵ国から、通信ネットワークオペレータや監督官庁職員など９名が参加し、最新の設備構築や保守運用業務、ＡＩ ・ＩｏＴを用いたＤＸ推進に関する取り組みなどを広く学んで頂きました。
質疑では、各国の受講生とオンラインでのコミュニケーションのみならず、チャットも活用し、設備・ケーブル等の浸水対策や安全の取り組み状況、ＡＩやＩｏＴの活用が期待される社会課題などに関する質問が投げかけられるなど、活発な意見交換が行われました。

人材育成

ＮＴＴ西日本では、業務の専門性とグローバルスタンダードなスキルを合わせ持ち、国内外問わずビジネスを遂行し、競争力を確保した価値を生み出すことが出来る人材を育成するため、毎年、グローバル人材育成研修を行っています。本研修は２０１１年から、集合形式で行って参りましたが、今年からは、集合形式と同等もしくはそれ以上の品質・効果を狙い、オンライン形式への変更およびカリキュラムの刷新を行いました。
本研修をオンラインで実施するのは、今年が初めてであったため、研修終了後に効果測定を行う予定ですが、関西エリア以外の社員も受講しやすくなり、オンラインでの会議や商談でのコミュニケーションについても学べるなど、メリットも多くあるなと感じています。

最後に

新型コロナウィルス感染症の世界的流行は、個人や社会、経済に大きな被害をもたらしました。我々の身近な所でも生活や仕事、お客様との関り方など大きく変化してきています。一方で、世界が抱える課題や今後のあるべき姿についても再考する良いきっかけになったのも事実ではないでしょうか。「ソーシャルＩＣＴパイオニア」として、社会課題解決に貢献する事はもちろんのこと、個々人のＷｅｌｌ－ｂｅｉｎｇが実現・連鎖する社会の構築にも寄与できる企業でありたいと思っております。
まだまだ世界的には、パンデミックの状況ではありますが、一日も早い終息を祈念いたしますと共に皆様のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

特別寄稿

岩槻日記(17)

当会特別顧問　石井　孝

「転勤」

ネット上のニュースを観ていたら、わが古巣の社長がリモートワークをフル活用して転勤を無くす。単身赴任などといった不便な昭和の遺物を解消する、といった趣旨の発言したようである。

かく言う小生も幾度となく転勤し、その中には単身赴任も経験した。

確かに、転勤は動くこと自体が厄介である上に、その土地の風土や変わった職場に慣れるには結構苦労する。

しかし振り返ってみると、そう言った経験が人生に幅と深みをもたらしたのではないかと思っている。

退職した現在でも、各地の友人から土地土地の名産を送ってもらったり、懐かしい便りが来たりすると、何とも心が温かくなる。

勿論それだけではない。転勤の経験から日本という国の幅広さと奥深さを身をもって知った事は、仕事の上でどれ程役に立った事であろうか。

この辺りの事は、海外への転勤にも全く同じ事がいえる。旅行で感じる外国はほんの上っ面に過ぎない、それは仮面かも知れない。其処に住み、そこで厄介な仕事で苦労して漸くその国の何たるかを漸く嗅ぎつけるのである。

最近の若い人達は転勤を嫌がる傾向がると仄聞するが、日本のような資源の乏しい国が生き残りをかけるためには、億劫がらず、兎に角、動き回る癖をつけることが、必須ではないかと思うのであるが。これは古臭い昭和人間の妄念なのであろうか。

「ＮＴＴドコモ、グループ企業のコムウェアを子会社化」

情報通信網の重心が端末に移った現在、ネットワークを強化する上で、当然の帰結であろう。

30 数年前、コムウェアの前身である通信ソフト本部は、当時ネットワーク機能の開発や異常障害時の対応をメーカー依存していたものを完全に内製化し、ネットワークのハンドリングを完全に自家薬籠中の物にした実績を持っている。

今回、ドコモは大きなトラブルを起こし、世間を騒がせたが、先ずは早急に、嘗て通信ソフト本部が手掛けたような措置をネットワークに施し、世間に誇れる強靭なネットワークを創って欲しい。

「痴人の愛」

エンタメ小説の時代物だけでは、すっかり、馬鹿なボケ老人になってしまうのではないかと恐れ、文豪と尊称される谷崎潤一郎の「痴人の愛」を読んでみた。

何故「痴人の愛」かと云うと、偶々NHK ラジオの朗読の時間で「痴人の愛」の一部を聴き、何か面白そうに思えたからである。

いざ読んでみると、うんざりするぐらい辟易する。しかし、何か惹かれるところがあり、止められない。

馬鹿馬鹿しくなる怖ろしい話である。まさに、「痴人の愛」である。

文学作品とはこういうモノなのだろうか。

再び「谷崎潤一郎」

先般の「痴人の愛」で、かなりうんざりしたが、不思議と後を引くので、「刺青」「秘密」「春琴抄」と続け様に読んでみた。
中身は、何れも「痴人の愛」と同質と云うか、あと味は似たり寄ったりである。
しかし、心理描写の鋭さと言おうか、作家としての感性と文章力・表現力はもの凄い。特に「春琴抄」は。文豪の文豪たる所以かも知れない。
如何も、私にはエンタメ時代小説が似つかわしいようだ。

「金色の死」

谷崎潤一郎の小説に表題の「金色の死」と云う異色とも思われるモノがある。
谷崎はこの自分が書いた小説を忌み嫌い、自作の全集に載せる事を決して行わなかったようであるが、三島由紀夫が選んだ谷崎全集には「金色の死」を乗せ、巻末の解説で、この作品を高く評価して居る。
私のような文学的センスに欠ける者にはよく解らないが、「金色の死」は、谷崎の芸術論で「芸術とは人間の感性に訴えるモノで、理性に訴える科学（自然・社会）とは本質的に異なると言って居るのではないかと、単純に思った。
だから、谷崎は「何を今更、青臭い事を書き並べたか」と想って居たのではないか、と感じたのであるが、諸賢のご意見をお教え頂きたい。

「小説の神様」

文豪、谷崎潤一郎に続き、「小説の神様」志賀直哉の「暗夜行路」に挑んでみた。
残念ながら、つくづく、自分には文学的才能が劣るのではないかと思えてならない。「小説の神様」が長年かけて書き上げた唯一の長編小説だと云うのに、正直の処、全体的には退屈であまり面白いとは思えなかった。
しかし、随所の情景描写や心理描写に対し、何か突き刺すような不思議な感動を覚える真に迫った記述があり、ついつい、一気に読んでしまった。
また、余計な事かも知れないが、小説の中の話とはいえ、全くお金に不自由する事の無いお坊ちゃまが、気儘に遊び惚けながら小説を書く。全く良いご身分だなと思った。
貧乏育ちで、職を得てからは夢中で働いて来た我が身を振り返ると、負け惜しみではないが、小説を読みながら、寧ろ、こちらの方が余程、幸せではなかったかと思ってしまうのである。
まあ、それにしても「暗夜行路」とは、よくぞ命名したものである。

「夜の橋」

谷崎潤一郎、志賀直哉と文学作品と称される小説を読み、些か重たい気分に落ち込んだ。
鈴木英治のエンタメ時代小説で口直しを試みた。とても面白かったが、もう一つ飽き足りない。
偶々、手元にあった藤沢周平の短編集「夜の橋」を読んでみた。藤沢周平の世界は、年を取って心が乾いて来たせいかもしれないが、ぐっと胸にしみるモノがある。

海外グラフィティ

「ザ・殺し文句」を読んで感じたこと

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

新潮新書「ザ・殺し文句」は非常に面白かった。結局、状況に応じて的確な文言を言い放つことだが、リスクも伴う。自分にとって一番の言葉は、今太閤と言われた田中角栄の言葉だ。以下の言葉は、田中角栄が大蔵大臣に就任してすぐに、大蔵官僚を前におこなったスピーチの一部だ。

「自分が、田中角栄である。ご存知のように、わたしは高等小学卒業。諸君は全国から集まった秀才で、金融財政の専門家だ。しかし、棘のある門松は、諸君よりいささか多くくぐってきている。しかし、今日から諸君と一緒に仕事をすることになるのだが、わたしは、出来ることはやる、出来ないことは約束しない。これから、一緒に仕事をするには、お互いをよく理解することだ。今日から、大臣室の扉は常に開けておくから、我と思わん者は誰でも尋ねて来てくれ。上司の許可はいらん。仕事は諸君が思うように、思いっきりやってくれ。しかし、すべての責任は、この田中角栄が負う。以上」

一瞬で秀才たちの心をつかんだのです。これぞ、典型的な殺し文句です。著者の川上徹也はコピーライター。さすがに一言で納得させるにはどうすればよいのかがわかっている。

個人的には、タイ TT&T の国際入札で相当の事前準備を重ねてある殺し文句を使いました。TT&T が一体何を不安がっているのか？何を望んでいるのか？を入念に調べ上げたのです。私は、南カリフォルニア大学の MBA を取得しましたが、その卒業生の伝手を頼り、タイでコンサルタントをしている先輩米国人に会いました。いろいろ話をしているうちにその人物が最強の競争相手のフランステレコムのアドバイザーだとわかりました。会談中、TT&T の不安は技術移転に伴う「実務訓練の中身」に関心があることに気が付きました。国際入札は、もちろん、入札金額など他の要素も重要ですが、実務訓練も非常に大事だとは思いつかなかったわけです。局外の通信工事や保守には手本を示さなければ技術移転は出来ません。会話の中でそのヒントを読み取ったわけです。あからさまに手の内を明かさなかったのですが、この「殺し文句」・・・「実務訓練の大切さ」をプレゼンの中で強調しようと決断しました。

入札は勝ちました。もちろん他の要素もありますが、相手の不安を取り除くような「断定的な殺し文句」が功を奏したわけです。殺し文句は、政治や商売だけでなく、文学でも威力を発揮します。最近感動したドキュメンタリーで「森は海の恋人」があります。宮城県で牡蠣士と呼ばれる畠山重篤氏を扱った作品ですが、感動しました。牡蠣の養殖には、海に臨む森の健全化が要求され、森の栄養が、海の植物プランクトンが牡蠣には欠かせない栄養物なのです。そのための植林がポイントです。これを畠山さんはせっせとやってきた。東北大震災の津波にやられましたが、海は生きていた。この植林のお陰だったのです。

郷土の歌人熊谷龍子の言葉がまさにその殺し文句です。「森は海を海は森を恋いながら悠久よりの愛紡ぎゆく」。ここからドキュメンタリーのタイトルにもなりました。畠山さんの仕事は、三人の息子さらには孫まで引き継がれています。畠山さんは「自分は子孫のための腐葉土でいいんだ」とこれまた素敵な殺し文句ですね。(2021.9.8 了)

「倉本聰の言葉」を読んで

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

碓井広義が選んだ脚本家・倉本聰の多くの作品中の名言を集めた本である。倉本聰と言えば、「北の国から」や最近では、「やすらぎの郷」や「やすらぎの刻」といったテレビドラマで人々に印象深い言葉を数多く残している。生まれは１９３４年東京・代々木生まれ、本名・山谷馨。東大文学部卒業で、ニッポン放送に入社。その後、フリーの脚本家に転身。北海道・富良野市に移住。「北の国から」で話題を呼ぶ。ここでは、生き方を主に脚本の中からこれはと思うものをピックアップしてコメントしたい。

まず、象徴的なのが次のチャップリンの言葉であり、これが、倉本聰の人生哲学でもある。

・「人生は、アップで見れば悲劇だが、ロングショットでは喜劇である」。

映画人らしいカメラワークで表現しているが、全体像を移す場合はカメラを引いて長めの映像にする技法だ。その時々では、思うように事が進まなくても、山あり谷ありで全体で見れば、まあまあの人生ではないかというコメントである。ただ、アメリカ人の高齢者の７割がもっと積極的に生きればよかったという感慨を持っていると言われている。

私的には、これよりも次のチャップリンの言葉が好きだが。

・「人生に必要なものは、勇気と想像力。それとほんの少しのお金だ」。
・「人が死ぬときの問題は、その人が本当に“納得”したか、どうかだと」。

やすらぎの刻のなかで出演者に語らせている言葉であるが、これは、あらためて、短刀を突き付けられているようで誠に凄い。東大法学部を首席で卒業、大蔵省にはいり、最終目標の事務次官になったエリートが「両手の指のあいだから砂がさらさらとこぼれ落ちるような虚しさ、自分の人生はいったい全体なんであったのか？果たして自身の人生を生きただろうか？」と。

・「わずかばかりで充分なのよ。本来、農業は商業と違う、自分で耕して自分で収穫して、自分が食えりゃあそれでいいのよ。・・・（中略）いっぱい作って売って儲けようなんて。そんなこと考えなきゃ楽に暮らせる」。

コロナ禍で悪徳商人がマスクの転売で“やりだま”に挙がっている。額に汗して得た正直者が損してはいけないと。これなど、倉本聰の両親がクリスチャンであったことの影響だろうか？

・「男の頭と女の頭はお前―機械でいや配線が違うんだ。男の頭がラジオの配線なら、女の頭はお前―テレビの配線よ。信じられない複雑さよ」。

リコーの創業者市村清はそれこそ波乱万丈の人生を送ったが、インタビューで「市村社長、世の中で分からないこと等無いでしょうね？」との質問に「女ごころだけは未だに分からない」と返事していたそうだ。

・書くということは、即ち生きるということなのだ。一読を勧める。（2020.6.21 完）

海外便り

スペインバスク地方・フランス南西部俳柳紀行(1)

（2019 年 10 月 29 日～同 11 月 12 日）

元 JICA シニアボランティア
北垣　勝之

わが旅はインバウンドの欧州路

ストップオーバー旅の仁義や方違(かたたが)え

私のヨーロッパ旅行もかれこれ 20 回を超える所に来た。なぜヨーロッパを巡るのか、そこには歴史と文化の糧が詰まっているからである。そしてＥＵとしての統一は、単一通貨とシェンゲン条約で国境を意識せず自由通行ができるというメリットもある。勿論、諸国言語の壁はあっても英語をベースにすれば意思疎通に事欠くことはない。それに世界人類史の培養基として人流・物流・金流を構築してきた地勢的条件が整っている。陸路だけでなく地中海やバルト海から大西洋まで河川と運河の水脈もある。今回の旅は、今まで置き去りにしてきたスペインバスク地方とフランス南西部を踏査するのが目的である。俗に美食･ワインの産地として人口に膾炙され､その意味では目新しさはない。もう一つ付け加えるならば、サンチャゴ・デ・コンポステーラに通じる巡礼路の出発点に近く、聖地探訪に繋げたい意図もある。そのため最後はピレネー山脈越えを狙うつもりである。

ボルドーワイン博物館
シテ・デュ・ヴァン展望室にて

先ずは、その前に私のヨーロッパへのハブ空港であるカタールのドーハに立寄り市内で一夜を明かす。これは旅の災厄を払う儀式にも通じよう。わが家から見たら東北の相対方向になる方違えとし、アッラーの神に安全祈願の仁義を切っておこうというものである。建前口上は以上だが、延べ 20 時間を超えるフライトの途中で一泊、骨休みをしたいというのが本音である。

払い過ぎチップが謎解くタクシー代
買物は交渉次第値札なし
出稼ぎの外国人が国支え

早朝のドーハ着陸、荷物を受け取って未だ真っ暗な中タクシーを走らせホテルへと急ぐ。レセプションでチェックインの手続きを終え、いざ部屋へとコンシェルジュが案内してくれる。ホテル到着からこの間、彼はずっと私の荷物をしっかり管理、室内の機器操作や注意事項を説明してくれた。あと何か用事があったらご連絡をとなったところでチップを渡す。空港で換金した現地通貨から少額でも渡そうと思ったが、手頃な 5 リアル紙幣がすぐには見当たらない。あまり意識せず同じ財布の中にあった 5 ドル紙幣を渡してしまう。彼が部屋を出た後「やり過ぎたな」とボヤクも後の祭り、「オマエがチップを渡せと急かしたからだ」と家内に八つ当たり、二人で口喧嘩になる。

ところが翌日チェックアウトのとき、このバングラデシュ出身のコンシェルジュがにこやかに声を掛けてきた。「空港までのタクシーなら私が手配して上げましょう。24 リア

ルで行かせます」と、こちらがびっくりするような安値を提示、「あと 5 分で来ますから」と大変ご機嫌な振る舞いで私たちの荷物を運び出す。実は、前日カウンターにいたインド人レセプショニストにタクシーの予約をお願いしたら、当日受付で申し込めば 40 リアルで行けますと言われ、そのつもりでいた。ドーハに着いたとき乗った正規の空港タクシーはメーター制で 50 リアル払った。一体全体ドーハのタクシー料金はどうなっているのか。正規料金でタクシーに乗るのは愚の骨頂、白タク横行の実態を知る。タクシー運転手は殆どが他国からの出稼ぎ労働者、今回は行きも帰りもパキスタン人だった。最後に空港まで運転してくれた運ちゃんは、車内で「24 リアルだね」と念を押したらしぶしぶ応諾した。でも飛行場で降車の際、私は 30 リアル支払った。中央アジア辺りから皆々苦労して出稼ぎに来ている人たちだ、できたら平等に料金を払いたいとの思いからである。

真珠のモニュメント　　*砂漠の地アラブ制覇にゃ馬が要る*

ペルシャ湾漁村変じて摩天楼　　*贅沢に水を流すや釣瓶井戸*

物価の値段についても一般には値札は付いていない。スークワキーフの市場を冷やかし散策した。日本で着ても涼しそうだなと思いながら、真っ白なアラベーヤの衣服を眺めていたら、店主が色々説明してくれた。安いのでは 200 リアルからあるが上限はきりがない。その中で私に勧めたいのはこれだと取り出したのが 800 リアルの代物、もしこの場で購入されるなら 700 リアルにおまけすると言う。こちらは元々買う意思はなく、サイズが大きいのは調整してくれるのか、頭に被るハッタはあるのかと勝手な質問を発して結構楽しむことができた。値段交渉の始まりは此処から。店主も客の居ない時間帯、無聊を変な日本爺との親善会話に尽くしてくれたわけだ。また水を買い求めんと、大型のペットボトルを脇において雑貨を売っていた露天商に「その水は何処で売っているか」と尋ねたら、自分の店を近くの友人に頼んで私たちを数十m離れた販売店まで連れて行ってくれた。砂漠の地では飲料水は意外と高くかつ必需品である。この店、近辺のボトル価格よりかなり安かった。一見の観光客相手ではなく地元の人が直接買う店がちゃんとある。郷に入れば郷に従うのが上善である。

いつもフリーおらがムセオのプラドかな

なぜゲートインにマドリッドを選んだか。今まで 3 回の訪問時はアトーチャ駅や中心街ソルに照準を当てて宿を取ってきたが、バスク地方への玄関口でもあるチャマルティン駅周辺にも興味があったからである。当初マドリッド空港からのアクセスを心配したが、スペイン国鉄(renfe)に乗れば空港 T4 ターミナル駅から 3 っ目がチャマルティンだ。実に最短明瞭な立地にある。この時の乗車券は 2 時間有効なのでホテルチェックイン後の行動に追加料金を払って活用した。アトーチャ駅までレンフェに乗って移動、今旅行最初の目的であるプラド美術館見学へと向かう。午後 6 時の無料入館に合わせて辿り着くとすでに長蛇の列、直ぐ後ろに並んだ人から「入場無料は EU 加盟国の人に限定されている」と言われ、「そんなことはないはず、3 年前の訪問時も同じように無料入館しましたから」とは言ったものの、その後変更されたのか不安になり正面玄関まで係員に確認に行く。長い行列にはアジア系の人たちも並んでいた。とんでもない法螺を吹く奴(中

年の女性)がいるもんだと、この EU 女に言葉を荒げて「予定通り私たちは入館しますよ」と一矢報いる。

私にとってプラド美術館は三回目の観賞、大方の展覧物は既知のはずだが、印象に残っている物は少ない。今回の狙いはゴヤ、中でも「裸のマハ」と「着衣のマハ」に的を絞って鑑賞、この一対の絵画の主人公たる美女の表情には微妙な違いがある。わが家の雌犬(老犬)はいつも裸のマハのようにソファに横たわる。この姿態が何とも艶めかしく、愛犬とゴヤマハの同一視から実物に再会したくプラドを訪れた次第である。入館 6 時半から 1 時間足らずで退出、辺りはすっかり夜の気配に包まれ、前庭の街灯が色づいたカエデを鮮やかに照らし、重厚な美術館の建物もライトアップされ一層ゴージャスな雰囲気を醸し出す。ここは間違いなく「私たち専用の美術館」である。(注) マハ(西語 maja: いい女)

プラド美術館正面のベラスケス像　　*レンフェ列車四両編成一単位*

アトーチャ駅前の横断歩道　　*終着駅ステンドグラス見事なり*

晩秋の車窓を飾る 黄葉(こうよう) かな

殺伐と荒野の如き農閑期

レンフェの長距離列車でビルバオに向かう。早朝の出立とあって朝食は出来合いのものを調達、駅の待合室で頂く。まだ時間に余裕ありと見ていたが、電光掲示板にチェックイン開始の表示が出る。急いで飲みかけのコーヒーカップを手にしながら出発ホームへ、カップを脇に置いて荷物類を X 線装置に通す。慌ただしい一時を過ぎれば後は一等指定席で寛ぐだけだ。約 5 時間、車窓からスペイン北部の晩秋風情を楽しむ。天気は曇り、街並みや原野の佇まいまでがどんよりしている。秋の収穫が終わり冬を迎える時期、田畑に人影や牛馬の姿なく、どことなく物寂しさを感じる。それを打ち消してくれたのが青松をバックに欅やプラタナスの黄葉である。マドリッドから列車は北へセゴビア、バリャドリッド、ブルゴスを経てミランダへ、ここでサンセバスチャン行きとビルバオ行きの部分に分けられ、それぞれ 4 両編成となって終着駅へと向かう。

南部の柑橘類や広大なオリーブ畑の景観とは違い、北部は穀薯類や酪農が主体の農業なのであろうか。また主要都市を含めどこか産業自体が不活性化している印象を受ける。鉄道も途中、異電圧区間を跨ぐところもあって減速・停車する。高速道をぶっ飛ばす自動車を遠く近くに眺めながら、鉄路輸送のインフラ整備の遅れが感じられる。昔日の栄光とは裏腹にカスティーリャ地方の後退を覗き見た思いである。(続く)

ウェブサロンの話、あれこれ

第 11 回 ICT 海外情報ウェブサロン模様

事務局

第 11 回 ICT 海外情報ウェブサロンが 2021 年 12 月 4 日(土)19 時 30 分～21 時(その後、22 時近くまで自由懇談)、ウェブ会議室において開催された。当会の佐竹幹事から「グアテマラと中南米の話をしてみたら」の話題提供があり、盛りだくさんで時間が過ぎるのを忘れるくらいであった。主な話題を以下に示す。

・初めての海外が、JICA 専門家として派遣されたグアテマラであった。Guatel で無線関係の業務に従事した。
・緯度はタイと同じくらいであるが、高度 1500 メートルにあり、常春という人もいる。
・公用語はスペイン語であるが、地方はマヤ系言語であり、21 種類くらいある。日常も業務もスペイン語で対応した。

・マヤ文明として有名なティカル遺跡に行ってきた。グアテマラシティから 300km くらいの距離にある。多数の遺跡があるが、まだ未開拓の遺跡も多い。
・1 号神殿はジャガー神殿とも呼ばれ、高さは 50～60 メートルくらいある。どの神殿も必ずペアで建設されている。
・グアテマラコーヒーはアンティグアで生産されるものが有名である。土産物店や輸出用のコーヒーは美味であるが、市中で売っているコーヒーはあまり美味ではなかった。

コーヒーの生産工程説明

コーヒーの花

・グアテマラ織は手作業で織られており、グアテマラの民族衣装にもなっている。チチカステナンゴでは週 2 日ほど市場が開かれている。衣装、布地だけでなく、帽子や財布もある。

質問・意見は多数あり、真にウェブサロン(遠隔井戸端会議)の雰囲気であった。主な話題を以下に示す。

・1974 年～1977 年に Guatel に JICA 専門家として派遣され、電話線路業務に携わった。当時はイギリス、ドイツなどの専門家も混在していて、激論になることもあった。無線技術は NEC、沖電気などの日本メーカーが進んでいたが、今はその面影はない。いつか復活してほしいものである。
・グアテマラは以前、内戦があったが、今はすっかり変化しており、ビルやショッピングセンターが多数建っている。
・ペルー、パラグアイ、パナマに JICA 専門家として派遣された。懐かしい想い出が多数ある。
・祖父がペルーに移住し、現地で亡くなった。中南米にはブラジル、チリなど、テレビ取材で何回も訪問した。中南米と一括りで言うが、各国とも非常に異なっている。
・ペルー、メキシコ、エルサルバドルを旅行した。中南米は陽気な感じに紹介されることが多いが、実は地味な人々である。グアテマラはマヤ人 50%、白人との混血 40%で、白人自体はほとんどいない。
・チリとメキシコに会社を設立した経験があるが、チリはかなり几帳面で儲かった反面、メキシコは陽気で自由な雰囲気であり、損失を計上してしまった。
・メキシコには 4 年間駐在したが、自由さ(いい加減さ)は事業所によると思う。勤務した事業所は女性が 6 割を占め、トップも女性であった。
・フィリピンでも女性の方が信用できることが多かった。女性も専門性が高い。
・チリのカルメネール赤ワインが好きであるが、最近は価格が高くなった。
・アルゼンチンはタンゴが好きな国である。
・グアテマラの音楽はマリンバである。木琴のようなもので、瓢箪を共鳴板として吊したものもあり、澄んだ音が出る。
・ブラジルはサンバとボサノバが特徴的である。
・メキシコでは、マリアッチという楽団を成人式、誕生日、恋人への求愛時、さらには告別式などに呼んで、トランペット、ギターなどの大音響で歌い踊る。華やかに死者を弔うのは、かなり文化の違いを感じるところである。
・アフリカの告別式も賑やかである。泣き女を雇うこともある。
・マチュピチュに旅行したことがある。NHK の中継クルーと同じホテルで出会った。
・中南米はサッカーが強いが、グアテマラは上位ではない。

・パキスタンに JICA 専門家として派遣されたが、イスラムでは酒は法度で、女性の外出も制限されており、今日の話は羨ましい限りである。

上記のように、政治、経済、文化等多岐にわたる中南米の経験談が活発に交わされ、また終了後も個室で話す参加者もあり、時間が過ぎるのを忘れるウェブサロンであった。

編集後記(編集者から一言)

皆様のご協力をいただき、おかげさまで会報第 101 号を発行することができました。今回は当会の本山顧問(NTT 西日本 技術革新部技術戦略部門国際室長)から「ＮＴＴ西日本　国際室の活動」の特別寄稿をいただくとともに、岩槻日記、海外グラフィティのご寄稿を継続、また新たにスペインバスク地方・フランス南西部俳柳紀行のご寄稿をいただき、誠にありがとうございます。

これまでのご協力に改めて心より感謝するとともに、当会及び当会報へのご感想、ご意見などございましたら、下記サイトにご記入いただければ幸いです。皆様からのさらなる会報へのご寄稿と ICT 海外情報ウェブサロンへのご参加をお願いするとともに、今後とも当会へのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

https://ictov.jimdo.com/コメント/

発行：　ICT 海外ボランティア会(ICTOV)
会報担当：　空席のため募集中（編集長兼広報部長)、山川　博久(事務局長)
ホームページ担当：　山崎　義行(報道部長)、安達　信男(幹事)